

教育実習等の指導内容に関する考察

田中弓子¹・佐々木利子²

A Study on the Instruction for Teaching Practicums

Yumiko Tanaka, Toshiko Sasaki

要約

この論文は、短期大学における幼稚園教諭免許に係る教育実習等（学校体験活動、教職実践演習）の指導上のポイントを3つの視点から検討したものである。まず事前指導の段階において、実習園がめざす理想像の理解に基づき、教諭や保育士にふさわしい身だしなみおよび心構えについて継続的に指導することが重要である。また、指導計画の立案を指導する際、模範的な案を示しながら、要点を講義することが必要である。さらに、事後指導の段階では、学生自身が意欲的に向上に取り組むための助言を個別に与えることが重要である。

キーワード：教育実習、事前指導、事後指導

(Abstract)

In this article, we examine the essence of instructor's guidance for Teaching Practicum (and School Internship and Practical Seminar for Teaching Profession), which is pertaining to the kindergarten teacher license in Junior College, from three perspectives. First, in the pre-guidance, it is important continually to teach students the appropriate appearance and disposition as a school or nursery teacher based on the understanding of the ideal image which the host institution pursues. Second, when the instructor guides the lesson planning, it is necessary to show the model plan and to lecture the points of lesson planning to students. Finally, in the post-guidance, the instructor needs to give advice to each students so that they can improve themselves with a will.

Keywords : Teaching Practicum, Pre-guidance, Post-guidance,

受理年月日 2017年11月30日

¹ 高松短期大学保育学科准教授

² 高松短期大学保育学科講師

1. はじめに

本稿では、これまでの教育実習等の指導の取り組みから、学生への指導内容を整理し、振り返りと考察を行う。実習事前指導における実習生の心得、実習事前指導における指導計画の立案、実習事後指導における振り返りの3点に関して述べる。ここで教育実習等とは、本学（高松短期大学）の「履修ガイド」ならびに「学生便覧」に基づき、科目における観察参加、教育実習、教育実習事前事後指導および保育・教職実践演習とする。

2. 教育実習等の日程

1年次後期に観察参加を行う。2つの幼稚園（こども園含む）で週に1回午前中に幼稚園へ出向く。加えて幼稚園を訪問しない日程の時は、身だしなみ、子どもおよび保育者との関わり、記録作成に関する学内で振り返りや今後の取り組み方法について学ぶ。次に、2年次前期には教育実習事前事後指導が行われ、主に学内で、教育実習に関する心構え、部分および研究保育の準備および事後指導として教育実習の振り返りを行う。教育実習は、2年次5月2週間（90時間）および9月（90時間）に設定している。保育・教職実践演習では、教育実習を行った実習園へ12月に1度訪問する。

3. 教育実習等の目的及び目標

本学の幼稚園教育実習要項には、目的を「幼稚園という教育現場において、幼児や教師と生活を共にすることで、幼児や保育に関する知識をより確実なものにし、同時に、教師の仕事について具体的に学ぶ」と記載している。

また、大学で学んだ理論や学習内容を、実践により確実なものとしていくため、次のような目標を挙げている。

- (1) 幼児の実態を把握し、理解を深める。
- (2) 幼児教育の特質を知り、保育技術の習得に努める。
- (3) 教師の職務や役割を理解し、その責任感と使命感を確立する。
- (4) 保育現場の実践を通して自己を成長させる。

4. 学生の実態

養成校での学びは、保育者として必要な能力を身に付けるため講義・演習・実習と様々な授業形式で行われる。いずれもその形式ならではの学びがあるのだが、入学までの幼児教育の現場体験が少ない学生にとって、現場での学びの機会が何よりも保育の実際を知る場と捉えられている。このことは、入学試験の面接時に、入学後の授業に対する期待を質問した際、多くの学生が教育・保育実習を挙げていることからもうかがわれる。

しかしながら、入学時の面接において、高校時代までの保育の現場での体験を確認すると、高校の授業等で定期的に保育所に行くなど、ある程度幼児との触れ合いを経験している学生は少ない。ほとんどの学生は、中学校の職場体験や家庭での弟妹との触れ合い、ボランティアへの参加など、数少ない触れ合いの中で保育者へのあこがれをもち、進路を考

えるに至っている。

このため、入学後の1年生に保育現場での子どもの様子や保育者のかかわり等、保育の実際を話していてもイメージがわからず、具体的な理解につながりにくい様子がうかがわれる。一方、教育実習を終えた2年生の後半になってくると、保育内容等の話でも自分の実習経験と重ねながら聞くことで、格段に理解している様子がうかがわれる。

さらに、ほとんどの学生が保育現場への就職を目指しており、学科として保育現場でのボランティアやアルバイトを推奨していることもあり、実習だけでなく子どもと触れ合う機会を多く持ち、そこから幼児理解や子どもへのかかわり方を実体験として学ぼうという気持ちは強い。また、研究室活動で模擬保育を実施し、保育指導案に基づく保育をしてみでの感想を出し合う等、学内での実践的研修にも取り組もうとしている。

その一方で、子どもたちへのかかわりや学級活動での指導が、うまくできるだろうかという不安は、どの学生にもみられる。また、ピアノの弾き歌いなど、人前での自身の技術を披露することに不安を抱えている学生も少なくない。

5. 実習事前指導における実習生の心得

5. 1 実習生の立場を理解

授業科目「観察参加」の開講当初に学生たちに伝え、確認することは、実習を「する」のではなく、「させていただく」という心構えである。「先生をめざすために実地（幼稚園や保育所）でその業務を経験する」ことを実習と捉えた際、それは学生側からの見方である。ところが、実習は子どもたちの生活とは関わりがない。むしろ子どもたち側の視点に立てば、子どもら自身と先生（園職員）との間で営まれる日常生活に突如として異質な人間（学生）が足を踏み込み、まるで先生のように園内で振る舞う状況（期間）と捉えられるだろう。このように、子どもたちの日常生活に少なからぬ影響を及ぼしていることを学生らに認識させるところに指導の意図はある。実習環境は大学や実習受け入れ園によって当然のように用意されるものであり、学生にはいわゆる利用者気分を実習期間を過ごしてもよいといった実習に対するイメージをもたせない措置と言い換えられる。

保育現場での主役は、いうまでもなく子どもである。その子どもの成長を阻害する言動をとらないために、「させていただく」という謙虚な気持ちで誠実に実習に臨む大切さを伝える。その意味を理解した学生は、発する言葉および日誌に記載する言葉にも「させていただく」という表現を次第に使用し始める。

5. 2 実習生の身だしなみの指導

定められた身だしなみで実習に参加することが実習の履修条件にもなっている。履修ガイド、実習指導事項等に記載している。

学生の身だしなみを考える基本として次の3つをあげている。一つ目は、保育学生として、勉強「させていただく」という謙虚さのある身だしなみ、二つ目は、園の方針に従っ

た身だしなみ、三つ目は、子どもの安全に配慮した身だしなみである。この基本的な考え方に基づき、下に示す表のような身だしなみ規定を定めている。

表1 実習における身だしなみ規定

項目	注意事項	男女別	
頭髪	色	自然な黒色。色が入らないなどの理由は認められない。 黒彩を使用しての修正は認めない。(生まれつきの髪色は申出)	
	長さ	耳や襟元につかない短髪にする。	男性
		肩にかかる場合は後ろの低い位置でしっかりと結ぶ。 ゴムの色は黒、茶、紺色を使用。	女性
		横髪が落ちないようにヘアピン(ピンも落ちないように)等を使用する。	女性
	前髪	散髪がいつであろうと、目がはっきりと見えること。	
	装飾品	シュシュなどを髪に付けてはならない。横髪等を押さえるためのヘアピンのみ可。	
	その他	エクステ、ウィッグを付けない。(医療的な場合は除く)	
上着	色	明るい色(パステル系のやさしい色)。	
	形	襟付きで、襟元が開いていないこと。パーカーは認められない。	
	デザイン	ワンポイントなど、できるだけ無地。 部活やイベントで使用した服、大きい文字やイラスト、高校時代に作成した服等は認められない。	
	重ね着	無地のトレーナー、カーディガンなど、気温によって考慮。	
	その他	服の上から下着が見えることのないよう、下着のデザインや色を配慮。	
ズボン	材質	ジーンズまたは綿のズボンで、ジャージは認められない。	
	デザイン	破れやダメージのない物で、装飾品もついていないもの。	
	サイズ	裾が床につかないもの。裾を折り曲げて長さを調節してはならない。	
	その他	しゃがんだり低い姿勢になったときに、背中が見えないもの。	
装飾品	ベルト	使用しても良いが、バックルの小さいもの。	
	腕時計	使用しても良いが、装飾的でなく、目立たないもの。	
	アクセサリ	指輪、ネックレス、イヤリング、ピアスなど、一切禁止。	
爪		常に短く切る(子どもにあたったときにけがをさせない長さ)	
		ネイルは、手、足共に禁止。	
眼鏡等		視力矯正のためのメガネ・コンタクトレンズは使用可。カラーコンタクトや目を大きく見せるためのコンタクトレンズは禁止。	
靴	上靴	底の薄いもので、脱いだり履いたりしがしやすいもの。	
	外靴	脱いだり履いたりしやすいスニーカーや運動靴を使用。ハイカットやヒールの高いスニーカー等は禁止。	

顔	化粧	普段化粧をしている人は、眉やファンデーション程度の、薄い自然な化粧にする。寝坊や準備不足によるノーメイクをしない。 前日の化粧が落ちていないという理由は認められない。	女性
		アイライン、つけまつげ、マスカラ、まつげエクステをしていない。	女性
	口紅を付けない。(必要であれば無色透明のリップクリーム程度)	女性	
	髭	必ず剃っておく。	男性

上のように定める要因は3つある。まず、一つ目は、学生が「問題なし」と考える事項と、保育現場での「問題なし」と考える事項との間には、残念ながら看過できない齟齬がみられるためである。そのため、できる限り保育現場での在り方を伝え、それに慣れさせていく必要がある。具体的には、子ども、保護者、実習園の先生方から見て、心地よいと感じられるか、服の模様や化粧が気になり、実習園の先生の話や活動に集中できないなど、保育において、子どもの意識の妨げになるような存在となっていないか、および、清潔で、衛生的に見て良好な身だしなみとなっているかである。二つ目は、保育現場によって、服装等の規定や考え方には幅があるためである。このため、緩やかな基準に慣れていると、就職園の基準が厳しい場合、就職後に学生自身が戸惑いを感じる可能性がある。このことから、どのような状況が保育者として最も望ましいのかを、実習を通して伝えているところである。三つ目は、現在のチェック表はかなり細かい規定となっているが、過去に学生が自己判断したことで課題となったものについては、すべて注意事項に加えていった経緯があるためである。このため、毎年何項目か追加されてきている。ただし、頭髪の色等、学生個々の事情もあるため、学生の人権を尊重することおよび保護者の同意等を得るなどの対応は丁寧に行っている。

5. 3 通勤および実習園内での立ち居振る舞いの指導

実習園までの通勤手段は、当該園から規定されることがほとんどである。それを学生が順守するように指導している。自明のことを言っているようであるものの、実習園周辺の環境に不慣れな学生に、指導を徹底することは難しい。そのため、実習開始より数か月前には、実習園を公表し、実習園の位置や交通手段を学生各人で確認できる時間を持つようにする。また、学生の通勤時間と実習園の子どもたちの登園時間が重なることも多く、子どもの登園を妨げないようにも指導する。さらに、園周辺での実習生の姿は、想像以上に目立つため、言動には十分注意し移動するようにもしている。

次に、園内での立ち居振る舞いである。園内にいるすべての人に、好感をもたれる挨拶をするように指導している。これも言葉では簡単なことではあるが、実習生の方から先にあまり慣れていない実習園で挨拶をすることは容易ではない。そのため、本科目の授業時のみならず、保育学科の他の専門科目と連携しながら大学生生活全体を通して先生を目指す学生として挨拶をする習慣をつけさせている。

5. 4 指導についての反省・考察

心得に関する指導をする中で、常識的なことも多く、本科目担当教員の意識の中にむなしさが残ることもある。しかし、学生へ心得や身だしなみを指導する際、「自明」のことを指導しているという意識を指導教員等（科目担当教員および実習園指導教員）が持たないことが大切である。保育の世界に初めて触れている学生であるので、一つずつ保育の常識を指導していくことが必要であると指導を講じる側は捉える必要があるのである。そうすることで、学生は真摯に指導教員等の指導を受け入れることができる。

6. 実習事前指導における指導計画の立案

6. 1 指導にあたっての留意事項

保育のねらいや活動の進め方は、学級の実態に応じて、また、これまでの遊びの経験に応じて変わってくる。このため、部分保育・研究保育等、保育実践にあたっての具体的指導は、各指導教員となる担任から受ける。

しかし、指導案として記入するにあたっての基本的な考え方や文章表現の仕方については、事前指導でも伝えることができるため、指導案作成のための時間を設けている。授業における指導としては、次の3点に留意した。

まず、修正箇所が多くなることで、自分なりに作成することへの自信喪失とならないように、できるだけ『提案』のかたちを取り入れる。次に、学生の経験値を考えながら、わかる範囲の指導となるようにする。最後に、どうしても押さえるべき点は押さえていくことを意識して行う。

作成した指導案の教育実習における活用としては、授業中に立てた指導案をもとに担任から指導を受け、研究保育を実施した学生もいれば、子どもたちの実態にそぐわない部分もあるとの指摘を受けて、改めて指導案を再度作成した学生もいる。

6. 2 指導の具体例

事前指導として、学生が作成した指導案にコメントを記入し返却している。コメントは、できるだけ具体的な文例等も示しながら、直接その場所には書き込んでいる。本研究ノートでは紙面の都合により、①のように番号と下線で表示した部分、また文全体を示す場合は文末に番号をつけたものについて、指導案の次に指導内容を記載する。

【事例1】 5歳児24人 9月の学級活動

題材名 進化じゃんけん

活動のねらい ・体を①めいっぱい動かし楽しむ。

・ルールを守ってゲームを楽しむ。

活動の展開(予想される幼児の活動と、環境構成及び留意点・保育者の援助部分を抜粋)

予想される幼児の活動	環境構成及び留意点・保育者の援助
<ul style="list-style-type: none"> ・片付けをする ・保育者の方へ集まる ・進化じゃんけんのルール説明を聞く ・ゲームに参加する ・グループを二つに分け、再びゲームをする ・ゲームについて話し合う ・片付けをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ片付けの時間を伝えておくことで、②<u>率先</u>して片付けに取り組めるようにする。 ・どのように集まるのか子どもたちに伝え、子どもから見やすい位置に立つ。 ・子どもに保育者が見えるか聞くことで、全員が話を聞ける環境を整える。 ・2～3人の保育者※と実際に簡単にしてみることで、より分かりやすく伝わるようにする。 ・ゲームのルールでも良いこと、注意することを子どもに③<u>尋ねる</u>ことでルールを確認する。④ ・ゲーム中に気を付けることを、例をあげて言うことによって、ゲームを楽しめるようにする。⑤ ・黒板に進化の順番を書いておくことで、子どもが戸惑わないようにする。⑥ ・子どもに進化の順番を聞いてみることで、ゲームを理解し、⑦<u>楽しめる</u>か確認する。⑧ ・初めは2人組を子どもたちがつくった後に、じゃんけんのタイミングを合わせ、ルールを確認する。 ・子どもが全員見渡せる場所で保育室を見て、子どもの様子を見られるようにする。 ・勝ち進んだ子どもは外側で友達を応援し、⑨<u>終わった後も楽しむ</u>。 ・遊びをより発展したものを提案することで、ゲームをより楽しいものにする。 ・終了時間をあらかじめ伝えておくことで、子どもが見通しをもってゲームに参加できるようにする。 ・子どもたちが話を聞ける状態になるように、どのように座ればよいか尋ねる。 ・子どもたちにどの動物まで行けたかなど話をし、ゲームを楽しめたか様子を見る。 ・子どもの気持ちを聞きつつ、次の活動にスムーズに取り掛かるように、気持ちが切り替わる声かけをしたり、子どもの気持ちを受け止める。

※担任及び実習生を合わせて、2～3人の保育者がいることを想定

① 『『めいっぱい』という表現は、指導案ではあまり使いません。よく見られているのは、「思いきり」ですね。」これは、指導案としての表現方法の提示である。

- ② 「『率先』は、人に先んじてという意味になります。ここで意図しているのは、「自分から」ということではないですか？」これは、文言の意図確認である。
- ③ 「表現として、『尋ねることで』というよりも、この場合は『子どもから引き出しながら』のほうがいいと思います。」これは、指導案としての表現方法の提示である。
- ④⑤ 「違いが分かりにくいです。④は、ルールについて、⑤はそれ以外のことについて話すという意味でしょうか？どちらもゲームを楽しむためには、守ってほしいものであれば、まとめたほうがいいです。」これは、類似内容の統一である。
- ⑥⑧ 「書いて、聞いてと重ねてする意図は何でしょう？より確実に理解させたいのであれば、例えば『進化の順を戸惑わないよう、黒板に書いておくとともに、子どもたちに聞いて確認しておく』とすれば、留意することと、そのための援助がわかります。」これは、援助の意図確認である。
- ⑦ 「順番を聞くことで楽しめるかの確認になりますか？楽しむための配慮や手立ては、この後に出てきますね。」これは、援助の意図確認である。
- ⑨ 「表現として、『ゲームの最後まで参加する意識がもてるようにする』でどうでしょう。」これは、指導案としての表現方法の提示である。

【事例2】 4歳児26人 9月の学級活動

題材名 秋の木の实落とし①

活動のねらい ・簡単なルールがわかり、友達とかかわりながら楽しむ②

活動の展開(予想される幼児の活動と、環境構成及び留意点・保育者の援助部分を抜粋)

予想される幼児の活動	環境構成及び留意点・保育者の援助
○遊びの話聞く ・絵本「もりのかくれんぼ」を見る ・保育者の説明を聞く ○ゲームをする ・円になって座る ・保育者の動きを見る ・秋の木の实落としをする ・保育者の話を聞く	・季節に合った絵本を見せながら問いかけることで、興味をもって③ <u>もらえるようにする。</u> ・子どもたちが見えやすい位置にし、絵本の読み方を工夫して配慮する。④ ・子どもたちに、クリやドングリを見せて、何をして遊ぼうかと子どもたちが興味をもつよう問いかける。⑤ ・円になって座るように呼び掛ける。 ・クリやドングリを入れた袋を使って実際の動きをし、回る方向を統一する。 ・保育者がクリやドングリをもち、分かるように子どもの後ろに落とし、保育者が初め鬼になり、配慮するようにする。⑥ ・落とされた子どもに、クリやドングリを拾って反時計回りに走るように声をかけ、援助する。⑦ ・子どもたちにルールがわかるように言葉かけをし、ゲ

	<p>ームを楽しんで③<u>もらえるようにする</u>。⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの様子を見て、何度も繰り返し、楽しめるようにする。⑨ ・子どもたちに終わりを伝え、話を聞いて③<u>もらえるようにする</u>。 ・子どもたちに感想を尋ねて共感をし、秋の季節を味わって③<u>もらえるようにする</u>。
--	--

① 「この題材名だと、ドングリ転がしのような違った遊びをイメージしてしまうことも考えられます。(ハンカチ落としのアレンジ)など、注釈を加えておくといいでしょう。」これは、指導案としての表現方法の提示である。

② 「ねらいにするまでもなく、4歳児のこの時期には、簡単なルールは分かるようになってきていると思います。むしろ『ルールのある遊びの面白さを味わいながら、友達とのかかわりを楽しむ』といった段階ではないかと思います。」これは、ねらいの考え方の提示である。

③ 「何度か、『もらえるようにする』という表現が繰り返されていますが、子どもたちにしてもらおうところでしょうか？実習生として遠慮する気持ちもあって、この表現になりがちですが、例えば絵本のところであれば、『興味をもって遊びに取り組めるようにする』でいいと思います。」これは、指導案としての表現方法の提示である。

④ 「文章表現として、配慮することがわかる書き方にしましょう。例えば、『絵本を読む位置や読み方を工夫するなどして、子どもたちが絵本を楽しめるよう配慮する』これは、指導案としての表現方法の提示である。

⑤ 「文章には問題はありませんが、子どもたちから『こんなことしたい』という様々な遊びが出てきた時どう対応するか、また、自分の考えていたものと違う方向に向かいそうな時、どう応えていくかも考えておく必要があります。」これは、援助の考え方である。

⑥ 「これも、④と同じです。『初めに保育者が鬼になり、クリやドングリが分かるように子どもの後ろに落とすなど、遊び方がわかりやすくなるよう配慮する』など、表現を考えましょう。これは、指導案としての表現方法の提示である。

⑦⑧⑨ 「ここは、遊びを楽しむための援助ですね。遊びが楽しいと感じられるには、どのようなことを意図していけばよいかを考えましょう。この場合、⑦ルールがわかって動けることで、みんなでゲームを楽しめます。⑧ゲームのワクワク、ドキドキするスリル感が味わえるような場の作り方も必要です。⑨友達との言葉でのやり取りや、かかわりも楽しさの要素です。このように考えると、⑦についてはしっかり押さえているので⑧・⑨に向けて、保育者が雰囲気をつくっていったり、子どもたちの言葉を取り上げながらつないでいったりという援助ができると、遊びがより楽しくなりそうですね。」これは、援助の考え方である。

【事例3】 3歳児22人 9月の学級活動

題材名 ロケットを作って月にいるウサギさんに会いに行こう

活動のねらい ・年中行事に親しみをもつ①

・手先の発達を促進する②

活動の展開(予想される幼児の活動と、環境構成及び留意点・保育者の援助部分を抜粋)

予想される幼児の活動	環境構成及び留意点・保育者の援助
○お月見の絵本を見る③ ・クレヨンを取りに行く ・いすに座る	・全員が絵本を見ることができている位置にいるかを確認し、見やすいように配慮する ・クレヨンを準備するように伝える。④ ・自分が座りたい席に座ることによって、楽しく活動に取り組めるようにする。
○お月見ロケットを作る ・説明を聞く ・紙に絵を描く ・紙コップに貼る ・紙コップに輪ゴムをかける ・クレヨンを片付ける	・どのようなロケットを作るかを伝え、興味を持って⑤もらえるようにする。 ・ロケットに貼る紙にはどのような絵を描いてもよいことを伝える。⑥ ・描く面を表にして配ることで、作業に取り掛かりやすくする。 ・絵を描き終わった子どもから紙コップを配り、両面テープをはがして紙コップに貼ることを伝える。 ・紙コップに輪ゴムをひっかけ、② <u>手や指の発達を促進する。</u>
・ロケットの遊び方を聞く⑦	・作り終わった子どもからクレヨンを片付けるように伝える。 ・ロケットの飛ばし方や注意事項を伝え、安全に遊べるようにする。⑧
○ロケットを飛ばす ・片付けをする	・ロケットを飛ばして遊び、友達同士で競ったりすることを楽しむ。⑨ ・ロケットのお家をつくり、最後まで活動の世界観を大切にする。

① 「お月見会当日は、『年中行事に親しみをもつ』というねらいを設定することが多いのですが、この段階は、『月やお月見への関心をもつ』といったねらいでよいと思います。」これは、ねらいの考え方・表現方法の提示である。

② 「保育者の援助を見ると、輪ゴムを使うところで『手や指の発達を促進する』とあります。確かに指先の巧緻性が必要な場面ですが、輪ゴムをかけることだけで、ここまで活動のねらいとする必要はないと思います。それよりも、題材名からは、ロケットを作ることを楽しんでほしいという保育者の意図が感じられます。それならば、①②を合わせて、『月やお月見への関心もち、自分のロケットを作ることを楽しむ』といったねらいではどうでしょう。」これは、ねらいの考え方・表現方法の提示である。

- ③ 「この部分の書き方としては、『○お月見やロケットづくりの話を書く』があり、その下に『・お月見の絵本を見る』『・ロケットを作ることについて話を聞く』が続き、それから『・クレヨンを取りに行く』になります。」これは、指導案としての表現方法の提示である。
- ④ 「準備するときに留意することは何でしょう。例えば、子どもたちが一斉にクレヨンを取りに行くと個人のロッカー前が混雑します。それに対して、『取りに行くときに混雑しないよう、順番に名前を呼んでクレヨンを準備するように伝える』など、意図も含め具体的な援助を記入します。」これは、援助の考え方・表現方法の提示である。
- ⑤ 「子どもたちに『してもらおう』という表現が適切かどうか考えましょう。実習生として、『もらう』という言葉を使いがちですが、この場合、『取り組めるように働きかける』という表現でいいと思います。」これは、指導案としての表現方法の提示である。
- ⑥ 「この意図は何でしょう？⑦描くことへの負担がないように⑧各自の発想を大事にしたい⑨ロケットづくりを楽しんでほしい、等様々な願いが考えられます。そこをはっきりともつことで、子どもに働きかける言葉等が変わってきます。文章に書きあらわさなくても、考えておきましょう。」これは、援助の考え方である。
- ⑦ 「この部分の書き方も、『○ロケットを飛ばす』の下に『・ロケットの遊び方を書く』があり、『・ロケットを飛ばす』『・片づける』と続きます。活動のくくりとしての『○』と、その中の細かな活動としての『・』の部分に同じ文章が出てくることはあります。これは、指導案としての表現方法の提示である。
- ⑧ 「これは、全員で集まって話すのでしょうか？ここからの活動が、作り終えた人から順次遊びに移るのか、一度集まって約束を話してから遊ぶのか、分かりにくくなっています。」これは、活動内容の確認である。
- ⑨ 「この文は、『子どもの活動とねらい』になっています。その時に、どんなことを配慮するか、その具体性があると、自分自身がよりかかわりやすくなります。」これは、指導案としての表現方法の提示である。

6. 3 指導についての反省・考察

これまでの実習において指導を受けている内容であるため「このことは当然行うべき」と考えたり、「このぐらいは理解できるだろう」と推測をしたりしたことをもとに指導を行ったが、文章もしくは口頭で伝えても、学生の反応として「なんとなくは分かるが、具体的にどうしたらいいかわからない」「適当な言葉が浮かばない」という様子が見られた。

見本の提示は、それに頼りすぎるきらいがあるため、まずは自分の言葉で書いてみることを、そこから整理することを伝えてきたが、ある程度は保育雑誌や参考書、また実習園での担任による師範保育指導案の文面を参考に、指導案としての形を覚えていくような経験を取り入れることも必要と感じた。

また、指導案作成については、他の教科でも取り組むことから、担当教員間での連携により、相乗効果となるように考えていきたい。

7. 実習事後指導として実習の振り返り

7. 1 実習の振り返りの意味と持ち方

教育実習は、子ども理解に始まり、園生活、保育者としての職務、保育指導の実際等、自分が担任となることを想定しての、あらゆる学びが同時進行で進んでいく。このため、部分指導、研究保育、全日指導と、自分が中心となって保育を進めていく場に置かれると、立ち止まって考える余裕が持ちにくくなる様子が見られている。学生は、実習中の日々の反省では、担当クラスの教員から個々に指導を受けている。しかし、全員の日誌の内容を見ると、個別の指導内容でも全体として共通化しておきたいものも見られる。このことから、事後の振り返りシートや実習日誌、また巡回で担当教員が目にした姿から、今後に向けて考えてほしいところをピックアップしながら、事後指導として伝えている。

7. 2 指導内容の実際

7. 2. 1 望ましい言葉遣い

丁寧語と敬語(尊敬語)が入り混じった言葉遣いになっているケースがある。また、「くれる」「あげる」という表現が多くみられる。具体的な例として、「立ってください」よりは、「立ちましょう」という言い方が望ましいことなどを伝え、言葉が示す関係性も意識することを指導した。

また、方言には、言葉の柔らかさや親近感につながるものもあるが、県外からの転居者に対して通じない場合もある。園の方針としての言葉遣いもあるので、園での共通理解のもと、話し方も意識していくよう指導した。

7. 2. 2 保育時間の見直し

一日の活動の流れを考えると、それぞれの活動に要する時間を見計らい、そこにゆとりを加えて、逆算しながら活動の開始時間を考えることによって、子どもたちに無理のない時間進行が行えるようになる。このことを踏まえ、保育者の時間についての見通しの甘さから、子どもたちに「時間がないから急ぎなさい」と言うことがないようにすることを指導した。

また、予測がしにくい活動では時間設定にゆとりをもたせ、早く活動が終えられた時にどうするかを考え、調整するといった配慮も考えてみるよう伝えた。

発達段階による、遊びへの集中時間や活動内容によって、適切な時間配分とテンポがある。研究保育や部分指導を通して感じた時間配分への自分なりの課題が、どのような要因によるものかを振り返ってみさせた。そのうえで、例えば、「子どもが十分に見られていない」「活動の具体的な流れが把握できていない」「個々に関わりすぎ、全体への働きかけができていない」といった課題に対し、自分自身がどのように取り組んでいくかを考えてみるよう指導した。

7. 2. 3 保育者としての役割の意識化

「製作活動における材料・教材の過不足の確認、共同使用の備品や教材の使用確認が事前に十分にできているか」「製作中に、子どもたちが手順説明を理解できているか、全体の進行状況の把握ができているか、ねらいに沿った子どもへの声掛けができたか」などが、保育者としての役割に対するチェック内容となる。これらは、指導案の「保育者の援助及び環境構成」として記されている部分であることから、指導案作成時、また保育実施時の意識化が重要になることを伝えた。

保育者自身の立ち位置をどのように考えるかで、子どもへの言葉かけや、子どもからの言葉への返し方が変わってくる。自分の考える保育の流れに引っ張っていく気持ちがあると、それに沿ったやり取りを意識してしまうし、子どもの言葉から引き出していこうと思いつきながら関わっていると、子どもから感じたり受け止めたりするものが増えてくることにも留意するよう指導した。

7. 2. 4 教材研究の考え方

「子どもたちが、どんなことがどれだけできるか」「どんなことに興味をもっているか」という、実態把握のもとに予想しながら教材について考えていくよう指導した。普段の生活の中での子どもの姿の読み取り・把握、子ども理解がベースとなっていることを忘れないように留意点として伝える。

選んだ教材に対し「保育者がなぜこれを経験させたいのか」「自分の願いは何なのか」を考えることで、保育の意図がよりはっきりとする。

製作の後、「端材はどこまでがごみで、どこまでが次に使える物なのか」といったことに対し、保育者の考えも伝えながら、子どもたちと一緒に考えることができれば、それが以降の片づけの基準につながる。この時に、衛生面とリサイクル意識、そして費用対価と効率なども考えるよう指導した。

7. 2. 5 子どもたちへの関わり

指導案の立案時、子どもの気持ちや動きの予測をどれだけしたかが重要なポイントである。例えば製作活動では、作ると嬉しくなり、それを使って遊んでみたくなることを予測すると、その対応も考えられる。その状況で、「作ったら待ってて」という指示は、子どもの気持ちにそぐわないものになってしまう。

また、保育の評価として「子どもたちが自分で考えてみる、やってみる機会とすることができたか。」を振り返ってみよう伝える。保育のねらいとしてめざすのは、自立性と自律性であり、それに向かう働きかけができたかどうかを振り返ることが大事である。

7. 2. 6 職員集団の在り方

現場では、時として「言ったつもり」「聞いていない」という行き違いが見られる。職員数が多くなるにつれ、共通理解を図る難しさもある。伝える意識、聞く意識をもって自分

が行動すること、そして確認をすることを習慣づけていくことで、関係性もよくなる。互いに声を掛け合うことを意識してほしいことも伝えた。

7. 3 反省と考察

事後指導は多岐にわたる内容をある程度項目ごとにまとめ、具体例も加えながら授業において指導を行っている。しかしながら、全体周知ではどうしても「自分のこと」として受け止めることが弱く、一般的内容としての理解になりがちである。個別の振り返りシートには、それぞれの課題についてのコメントを記入して返すが、それに対しどう考え、後期セメスタで自分なりに取り組んでいったかの検証を考える必要がある。

8. まとめ

教育・保育実習の授業では、学生には、心得、身だしなみ、および立ち居振る舞いといった非常に基本的なことから指導する。この基本的なことが保育者としての基本であり非常に大切なことであると、教員および学生が認識することから、実習指導は始まる。

実習開始前に不安な表情を示していた学生が実習終了後に述べる「子どもたちと別れることがさみしかった」「大変なこともあったが、子どもたちと過ごすのは楽しかった」といった感想から、実習で様々なことを学んできたことが伺える。また、実習後の授業で、保育内容や、子どもとの関わりについて学生が意見を述べる際、細部への着眼や子どもの心に寄り添い考えようとする姿勢から、保育理解の深まりが確認される。実習による直接体験が、大きな学びの場であるからこそ、そこに至るまでの指導と、振り返りにより、体験内容がより充実したものとなるといえよう

参考文献

- ・高松短期大学『幼稚園教育実習要項』2017.
- ・高松短期大学『履修ガイド』2017.
- ・大豆生田啓友ほか『幼稚園 保育所・施設実習〔第2版〕(最新保育講座)』ミネルヴァ書房、2014.
- ・山本淳子『実習の記録と指導案』ひかりのくに、2011.